

審査の結果の要旨

氏名 姜露

たとえば、項（名詞句）を2つ持つ構造の文で使われる動詞は、それら2つの項のあいだにある因果的影響関係をあらわす。このような文構造（項構造）と動詞の意味とのあいだにある対応関係を理解していれば、子どもは、初めて耳にした動詞でも、それが用いられていた文の構造を手がかりとして、おおよその意味を推論することができるはずである。では、子どもはいつからこのような項構造知識を使うことができるのだろうか。この文法発達の問題を、中国語学習児を対象として実証的に検討したのが本論文である。

論文は全7章からなる。まず第1章では、項構造知識の発達を、欧米の言語とは異なる構造的特徴を持つ中国語の学習児で検討することの意義が述べられた。特に、中国語は、英語などとは異なり、項の省略を許すため、子どもへの言語入力、項構造と事象の性質とのあいだの対応関係の学習を保証するようなものになっていない。だからこそ、中国語学習児で、英語学習児と同様の項構造知識が同様に早い時期から見られるかどうかは、文法知識の生得・学習論争においてもクリティカルな証拠となりうることが指摘された。

第2章では、2歳児とその母親16組の発話が分析され、中国語話者である母親の発話においては項の省略が頻繁に起こっていること、特に、SVO文は因果事象を記述するのにしか用いられないが、SV文は因果事象にも非因果事象にも用いられることが明らかにされた。第3章では、2歳、3歳、4歳、5歳の幼児を対象とした3つの研究において、SVO文が因果事象を指すという知識は2歳の段階で既に獲得されているものの、SV文が非因果事象を指すという知識は5歳になっても獲得されていないことが示唆された。第4章では、2歳、3歳、4歳の子どもはいずれも、SVO文が因果事象を指すことだけでなく、その主語(S)が動作主体を、目的語(O)が動作対象を指すこと（項の意味役割）も理解していることが見出された。第5章では、中国語話者の大人を対象に検討が行われ、大人も、SVO文は因果事象を指すとするがSV文は必ずしも非因果事象を指すとはせず、この点で幼児と同じであること、しかし、非因果事象を記述する文としてはSVO文よりSV文が適切であることが見出された。第6章では、4歳児、5歳児が、因果事象や非因果事象を記述するのにSV文とSVO文のいずれを適切と考えるかについて検討したところ、どちらの年齢グループの子どもも大人と同様に、因果事象を記述するにはSVO文が、非因果事象を記述するにはSV文が適切であると判断した。以上、論文全体を通じて、中国語学習児は、入力言語の影響とともに、人間に普遍的な認知バイアスの影響も受けながら、項構造についての知識を発達させていくことが示唆された。

本論文は、幼児から大人までを対象とした実験の積み重ねにより、これまであまり知見のなかった、中国語学習児の項構造知識の発達プロセスを明らかにし、子どもの文法発達に入力言語の構造が及ぼしうる影響について新しい知見を提供するものとなった。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。